

第5章 不登校の未然防止と指導・援助の実際

1 A小学校における実践例

(1) 児童理解について

ア 学級集団用「学校楽しいーと」の結果（調査期日：平成26年11月13日 調査人数35人）

本学級の児童は、「心身の状態」（11.5）以外は、県平均を下回り、その中でも特に、「教師との関係」（10.0）「自己肯定感」（10.1）「学級集団における適応感」（12.3）の3点については、大きく下回っている状態であった（図30）。

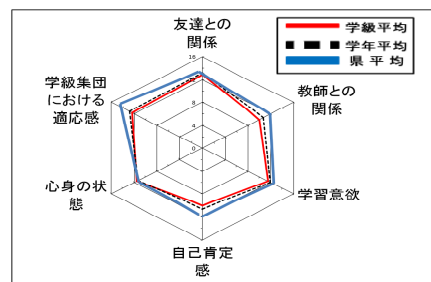


図30 学級集団の「学校楽しいーと」結果

イ 集団用「学校楽しいーと」分析シートの活用

「学校楽しいーと」の結果（図30）を受け、本学級の「ストロングポイント」、「ウィークポイント」、「資源（リソース）」、「阻害する要因」を分析した。結果を図31に示す。

(ア) 資源（リソース）

○ 校内でのサポート体制

担任は、新採2年目の教諭である。日頃から意欲的に学級経営に取り組んでおり、他の先生方のアドバイスも素直に聞き入れることができる。学校全体で若い先生方を育てていこうという雰囲気があり、そのサポート体制も整っている。

○ 保護者の協力体制

担任が初めての高学年担任ということもあり、学級の保護者全体で担任を支えようという雰囲気がある。

(イ) 阻害する要因

○ 担任の経験不足

新採2年目ということもあり、学級経営や不登校対策において経験不足は否めない。

○ 兄弟姉妹関係の影響

中学、高校に兄弟姉妹がいる場合、その影響を大きく受けている状況がある。

(2) 自己肯定感を高めるための授業実践（道徳「命をみつめて」 資料 学研「みんなのどうとく」）

ア ねらい

生命には終わりがあり、限りある生命だからこそ、精一杯生きようとする態度を育てる。

イ 授業の実際（1/1）

過程	主な学習活動 児童の考え	時間	指導上の留意点
導入	1 「本当の幸せ」とは何かについて考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のやりたいことができること。 ・ 毎日、楽しく過ごすこと。 ・ 家族と一緒にいること。 	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 猿渡瞳さんの弁論大会の最初の部分を聞かせ、本当の幸せについて考えさせる。 ○ 猿渡瞳さんの弁論大会の言葉から本時のめあてにつなげる。
	2 本時のめあてを設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 今、生きている私たちは、どのように過ごしていくことが大切だろうか。 </div>		
	3 資料「命をみつめて」を読み、瞳さんの気持ちについて話し合う。		<ul style="list-style-type: none"> ○ 話し合いたい場面を、自分たちで考えることで、より主人公の気持ちに共感できるようにする。

展 開	(1) 「がん」と分かった時の瞳さんの気持ちを考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 死ぬかもしれない。こわい。 ・ なぜ、私のがんにならないといけないの。くやしい。 ・ 死にたくない。 ・ 絶対にがんに勝ってみせる。 </div>	8	○ 「がん」の病気についての補足説明を行い、瞳さんが「死」とどういう気持ちで向かい合っているかを考えさせる。
	(2) 瞳さんが弁論大会へ向けて頑張ることができた理由を考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ① 病気に負けたくない。 ② 家族に頑張っている姿を見せたい。 ③ 世の中の人に「本当の幸せとは何か」を伝えたい。 </div>	10	○ 小グループで話し合うことで、自分の考えを補充・深化させる。 ○ 小集団での話し合いに入る前に、各班リーダーに「なぜそう思ったのか。」等の質問をするように助言する。 ○ 頑張るための様々な思いに気付かせるために、以下の観点で類型化を行う。 ① 自分自身を中心とした考え方 ② 他者への思いを中心とした考え方 ③ 社会や将来へ向けた考え方
	(3) 「今、生きている」の「今」には、どういう意味が込められているのか考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今、頑張ることが大切だという意味。 ・ 今を大切にしないといけないという意味。 </div>	10	○ 「死」を見つめることで、「今」が大切であることに理解させる。
終 末	4 これまでの生活を振り返り、「今、生きている」自分を見つめる。	7	○ 自分たちにも輝いている瞬間があることに気付かせ、今後の活動への意欲をもたせる。
	5 日常生活で頑張っている自分たちの写真を見せることで本時のまとめをする。		

(3) チーム支援

ア 基礎情報の収集と分類

前年度の欠席状況を確認すると、「二次サポート群」に該当する児童は2人であった(表6)。

Kは、欠席が41日あり、

表6 本学級「二次サポート群」に該当する児童の欠席状況

「年間30日以上欠席」の「不登校」に該当する児童とも言える。しかし、欠席理由は、腹痛や頭痛、通院などが主であり、通常ならば、「病気」として対応してしまう児童でもある。

児童名	欠席日数	欠席理由	特記事項
K	41日	腹痛13, 頭痛10, 通院9, けが2, 発熱7,	症状が軽くても欠席する傾向
L	11日	風邪9, 頭痛2	少年団の試合後に欠席する傾向

Lは、欠席日数は11日であり、不登校該当の児童ではないため、これまでであれば特に不登校の対象としては注意を払わなかった児童である。今回、「二次サポート群」に該当したことで、前担任より話を聞いてみると、特に、少年団の試合がある休日明けに欠席する傾向が見受けられた。

イ 「チーム支援シート」の活用

(ア) 「チーム支援シート」による分析

「学校楽しいーと」の学級集団分析の結果を受け、担任の経験不足を補うために、学年全体でチームを組み、実践に取り組むことにした。対象の2人の児童について、「チーム支援シート」を記入し、より深い分析を行った。特に保護者との連携については、学校全体の課題でもあると考え、兄弟姉妹関係に関する情報等の項目を増やし(表7)、重点的に行った。

表7 本校における「チーム支援シート」内の基本情報「保護者との連携」の追加情報

<p>11 保護者との連携</p> <p>家庭内会話 ◆会話多い</p> <p>家庭の様子 ◆問題なし</p> <p>兄弟姉妹関係 ◆兄は不登校傾向</p> <p>状況理解 ○・△・×</p> <p>信頼関係・児童 ○・△・×</p> <p>信頼関係・保護者 ○・△・×</p>	<p><本校における「保護者との連携」追加情報の注釈></p> <p>兄弟姉妹関係：気になる兄弟姉妹関係の状況を記入する。例えば、中学生のときに不登校傾向であったかどうかや仕事の有無、同居の有無等について、本児への影響が考えられる状況を記す。</p> <p>状況理解：保護者が、本児の不登校（欠席）の状況を理解しているかどうかを記入する。 ○：保護者がしっかりと理解している。△：薄々感じている。 ×：我が子は不登校でないと考えている。</p> <p>信頼関係・児童：担任と本児との信頼関係について記入する。 ○：困ったことがあるときに担任に相談できる。△：声を掛けると話ができる。×：担任に対し、話をしようとならない。</p> <p>信頼関係・保護者：保護者と担任との信頼関係について記入する。 ○：困ったことがあるときに担任に相談できる。△：電話を掛けると、話ができる。×：担任と話しようとならない。</p>
---	--

(イ) 指導・援助方針と児童の変容

「基本情報」、「資源」、「見立て」を基に、チームで対象児童の「指導・援助方針」を立案し（表8、表9）、実施した。

表8 Kに対する指導・援助方針

指導・援助方針	誰が	何を	機会	
① 自己肯定感を高める授業	担任 学年部	自分のよさや、頑張っている自分に気付かせる働き掛け	学活 道徳	<p><① 自己肯定感を高める授業> 自分のよさに気付いていない、気付こうとしていないので、自分のよさに気付くことができる授業を行う。自分にもよいところがたくさんあると気付かせることで、自信をもって学校生活を送れるようになるを考える。</p>
② 基礎学力の定着	担任	家庭学習用プリント作成、テストに向けた目標設定	家庭学習 教育相談	<p><② 基礎学力の定着> 「自分ではできない。」「頑張っても無駄だ。」という意識を払拭させるために、個別のプリントを準備し、基本的内容の確実な理解を進めて、テストに対する目標を設定させる。周りと比較させるのではなく、自分自身の成長を意識させるように教育相談を実施する。</p>

表9 Lに対する指導・援助方針

指導・援助方針	誰が	何を	機会	
① 自己肯定感を高める授業	担任 学年部	自分のよさや、頑張っている自分に気付かせる働き掛け	学活 道徳	<p><① 自己肯定感を高める授業> 担任から本人への「認められる機会」を多くもたせることで、自分のよさに気付かせ、「今の自分でよい」という安心感をもたせ、友達への肯定的な理解を促すようにする。</p>
② 保護者との信頼関係の構築	担任	本人のよさや努力していることを伝える働き掛け	家庭訪問 電話連絡	<p><② 保護者との信頼関係の構築> トラブルが生じる度に保護者へ電話連絡をしていたが、担任として、本人のプラス面を積極的に伝えるようにする。</p>

(4) 成果と課題

ア 成果

「学校楽しい」とや「チーム支援シート」を活用することで、児童の実態を的確に把握できるとともに、チームによる授業づくりや不登校傾向の児童への関わりを組織的に取り組むことができた。

イ 課題

取組の成果を見極めるためにも、本年度だけの分析ではなく、小中連携を通じた来年度、再来年度の分析が重要であるため、より一層、具体的な小中連携を進めていく必要がある。

2 B中学校における実践例

(1) 「心の教育」の推進と積極的生徒指導の充実

生徒の道徳性を養うための手立ての一つとして、心の教育全体計画を作成し、その実践に努めている。生徒一人一人の心身の健やかな成長が、自他共に尊重し、円滑な人間関係を築くことに結び付き、不登校につながるいじめ等の問題を未然に防止できる。今年度、本校では、東日本大震災で被災した東北地方を支援するために、生徒会を中心にさつまいもを栽培し、岩手県大船渡市の中学校8校に届ける活動を行った（写真1）。その活動や交流を通して、生徒は、中学生が実際にできる等身大の支援とは何か深く考え、人と人とが互いに支え合い、分かち合うことの大切さについて知ることができた。



写真1 さつまいもの収穫

全教職員が参加する「心の教育推進委員会」を年6回実施し、支援や配慮を必要とする生徒について、その現状や支援の在り方などの多面的な理解と情報交換を行っている。生徒の状況は、学校行事や部活動等、様々な状況において日々変化する。そこで、学習面や生活面、健康面など、様々な観点から生徒を捉え、実態把握に努めるとともに、学級・学年の枠を越え、様々な立場からの支援の在り方について検討している。

また、本校では、特別な支援を必要とする生徒に対し、各教師が教科の枠を越えて協力し合う、T・T体制や個別での学習支援を実施している。本校の3年生には、受験期が近づくにつれ、学習への不安から欠席や遅刻、早退を繰り返す生徒が増える傾向が見られる。そこで、スクールカウンセラーの教育相談等も活用しながら、生徒のつまずきに対して具体的な学習支援を実施するなど、特別支援教育の視点からの体制づくりにも力を入れている。

(2) 「学校楽しいと」による生徒の実態把握（5月・10月）

本校では、修学旅行等、学年別の学校行事が実施される5月には、新しい学級集団での状況を把握するために、夏休みや体育大会などの学校行事を終える10月には、学級の状況や生徒の人間関係等に変化が見られることから、年2回、全学年で「学校楽しいと」を実施している。

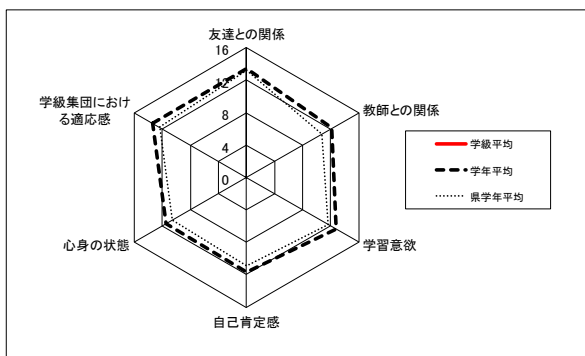


図32 1年生（5月）

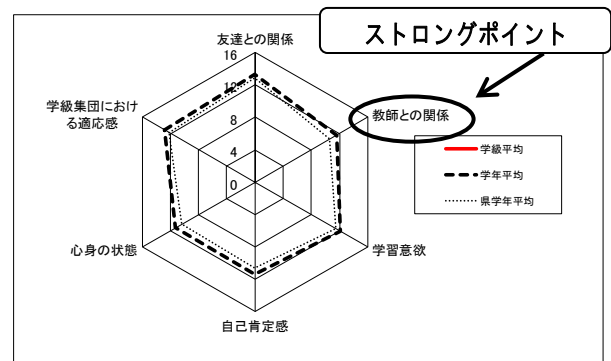


図33 1年生（10月）

本校の生徒は、どの項目も県平均と同程度か上回っている。特に、1年生については、全ての項目が県平均を上回っており、生徒の置かれている状況が比較的良好であることが分かる（図32、図33）。3年生については、5月よりも10月のポイントが全体的に向上していた。これは、中学校生活最後の行事に意欲的に取り組めたことから、学校や学級の一員としての所属意識が増し、充実した学校生活を送ることができているからであると考えられる。しかし、2年生は、5月に比べて10月のポイントが全体的に低下しており、特に「友達との関係」は県平均を下回っていた。このことは、夏休み以降、問題行動や交友関係のトラブルなどが増加している現状にも顕著に現れていた。また、

「学級集団における適応感」の項目もわずかながらポイントが低下していたが、2学期以降に行われた学校行事への取組の姿勢を見ても、学級集団としてのまとまりが弱まっていることが分かる。

「学校楽しいーと」において全学年に共通しているストロングポイントは、「教師との関係」である。生徒との信頼関係を強みにして、生徒が学校生活に不安を抱えたり自信を失ったりしたときに、適切な指導と援助ができるような体制づくりを行う必要があることを改めて確認した。

そこで、全校生徒の昨年度と今年度の出席状況を基に、「一次サポート群」と「二次サポート群」へのグループ分けを行うことで、指導や援助を必要とする対象生徒を把握できるようにした。あわせて、教職員は自分の所属する学年を中心に、対象となる生徒の状況（遅刻・早退等）を常に意識し、必要な時期に適切な対応ができるようにした。

(3) 「チーム支援シート」を活用した個への指導・援助

【生徒Mの概要】

生徒Mは、物静かで控えめな性格の中学1年生の男子である。1学期半ば頃から学級内での交友関係における悩みも見られたが、欠席はなかった。しかし、夏休みを挟んだ9月頃から「登校渋り」が見られるようになった。「学校楽しいーと」は、5月、10月、1月の3回実施した。

【「学校楽しいーと」の結果による生徒Mの変容】

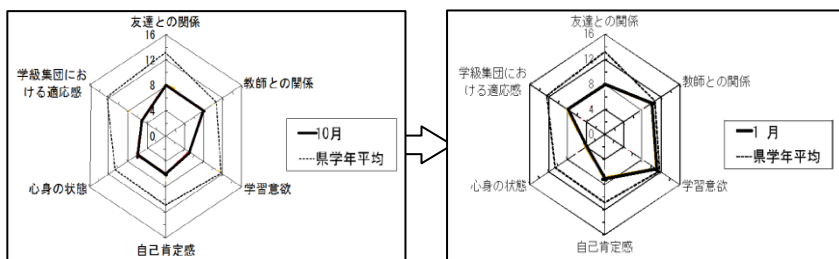


図34 生徒M (10月)

図35 生徒M (1月)

表10 6観点の変容

観 点	10月	変容	1月
友達との関係	8	→	8
教師との関係	8	↗	10
学 習 意 欲	5	↗	12
自己肯定感	6	↗	7
心身の状態	6	↘	4
学級適応感	5	↗	8

ア 10月の結果の分析

全ての観点において低い傾向が見られ、その中でも特に「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」が低いことが分かる。学級内に親しい友人がいないことや本校在籍の兄との関係があまり良好でないこともあり、欠席日数が増えつつあり、学級に入ることができなくなっている。

イ 指導・援助の方針

学年部や支援チームと連携を図りながら、本人の心の不安を解消・軽減することで、学校・学級への所属感を高め、仲間とともに円滑な学校生活を送ることができるように働き掛ける。

ウ 具体的な働き掛け

- 「チーム支援シート」(図36)を基に、多くの教職員で指導・援助する体制をつくった。
- 母親の相談窓口として養護教諭が当たることで、母親の負担軽減を図った。
 - 養護教諭、スクールカウンセラー等を中心に、本人の不安を解消する場を提供した。
 - 別室での学習指導を行えるよう、支援体制の確立を図り、教職員が分担して個別支援を行った。
 - 兄の担任や学年部とも連携を図って、兄との関係の改善に努めた。

- 自己肯定感や学級への所属感を高めるために、構成的グループエンカウンター等を実施したり、学級全体における語り掛けを行ったりした。
- 本人の状況について共通理解を図るとともに、様々な教職員が積極的に声掛けを行い、関わりをもつことを試みた。

見 立 て	人とのコミュニケーションが上手にとれず、他の人から話しかけてほしいが、自分からは話しかけたくはないという考えをしているようである。学校・家庭双方において人間関係がうまくいっていないことから、自分に自信がもてず、また他人と触れ合いたいと思いつつも、積極的に関わることに不安を感じているのではないかと。			
	指導・援助方針	誰が	何を	機会
① 学校・学級への所属感を高めるための働き掛け	担任 養護教諭 S C	担任 学年主任 養護教諭 S C	・不安の解消(学校・家庭) ・生徒会活動における係分担 ・自己肯定感の向上 ・学級経営 ・学習習慣の定着	・保健室や相談室でのカウンセリング ・生徒会活動 ・個別指導 ・普段の授業 ・学級活動

図36 「チーム支援シート」の一部

エ 1月の結果の分析

図35、表10のとおり、6観点中4観点においてポイントが上昇するなど、全体的にポイントが高くなった。特に「学習意欲」や「教師との関係」、「学級集団における適応感」に改善が見られた。本人の状況に併せて多くの教師が学習支援を含めて具体的に関わるとともに、本人を受け入れる学級の生徒への関わり方が効果的であったことがうかがえる。

本人は、文化祭を機に少しずつ登校できるようになり、保健室などの別室登校ができるようになってきている。さらに、1月の「学校楽しいーと」実施時には、完全ではないが、学級に戻り始めることができるようになった。

しかし、まだ「心身の状態」の低下に見られるように、時折、不安定になることもあるので、今後も個別の学習支援等を受けながら、関係機関や教職員との連携を図りつつ、注意深く見守っていく必要がある。

(4) 成果と課題

ア 成果

- 学校全体で「学校楽しいーと」を2回実施したことで、生徒の変容を見ることができるとともに、その現状に応じてより適切な指導・援助へと軌道を修正することができた。また、教職員の「見取り」や諸調査の結果と合わせて、多面的・多角的に生徒個々の実態を把握することができるとともに、生徒の実態をその項目に応じて系統立てて理解することに効果的であった。
- 「二次サポート群」の群分けや「チーム支援シート」を活用したことで、教職員間で共通理解を図りながら、個々の生徒に対して適切な指導・援助の在り方を具体的に考察し、チームとして働き掛けを行うことができた。

イ 課題

- 今年度は「学校楽しいーと」を全体では、年2回実施したが、より深い生徒理解のために今後も年次をまたいでデータを蓄積していくことが必要である。
- 不登校傾向の生徒だけでなく、問題行動等を抱えた生徒についても「チーム支援シート」を積極的に活用し、教職員間で連携を図りながら指導・援助に努めていくことが必要である。

3 C高等学校における実践例

近年における核家族化の急速な進行や、携帯電話をはじめとする情報機器等の普及、更には、集団体験活動を行う機会が減少している中、対人関係でのソーシャルスキルの未熟さが一因と見られる様々な不適応が生じている。デジタルネイティブ世代の生徒たちは、日常生活の中でネットスラング（ネット用語・記号）を巧みに操り、自分の実感を「短い言葉」で表現するのが主流となっているが、その一方で、語彙の乏しさや表現の稚拙さがみられ、自分の考えを伝えることや、自分の立場をはっきりさせて主張することが不十分となり、ささいなコミュニケーションの行き違いなどをきっかけとしたトラブルが発生している。

そこで、生徒の実態を把握して、指導の目標や手立てを設定する際の根拠にするとともに、その結果を基に学校のみならず生徒を取り巻く全ての環境の整備を視野に入れた包括的な支援体制の確立を意図して「学校楽しいと」を実施した。

(1) 予防開発的な不登校の未然防止

本校では、既存の組織である心の教育推進委員会が中心となり、前年度における出席等の状況を基に「一次サポート群」と「二次サポート群」に二分し、その上で、傾向分析から欠席状況の類型化や、学習・生活状況、更には、生徒及び保護者とのラポール（信頼関係）は築かれているかなど、状況把握と的確なアセスメントに全力を挙げて取り組んだ。これにより、生徒理解はもとより、全職員の不登校に対する意識が高まり、学校全体として組織的な指導体制の整備・充実につながった。

(2) 「学校楽しいと」による学年の実態把握

本校では、生徒理解を深めるツールの一つである「学校楽しいと」を5月下旬、10月下旬に実施した。

ア 学年への対応

図 37 は5月に実施した2学年の「学校楽しいと」の結果である。この結果から、「自己肯定感」が県平均に比べ著しく低く、さらに、「学級集団における適応感」が低いという結果が明らかとなった。そのため、ストレス対処法を含む問題解決スキルや、主張スキルを含むコミュニケーションスキルとの関連が深いソーシャルスキルの獲得を目指し、技能を高めるソーシャルスキルトレーニング（以下 SST という。）を計画的に繰り返し行い、生徒の「自信の創出」につながる指導・援助が必要であると判断した。その際、様々な成功体験を仕掛け、他者の言動をしっかりと受容し、共感をもって接することを重視する働き掛けが必要と考えた。

【「学校楽しいと」の結果による集団（2学年）の変容】

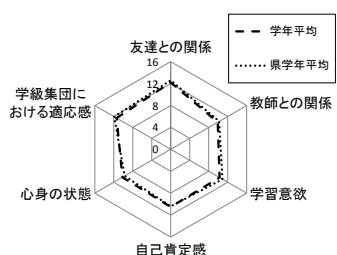


図 37 5月の状況

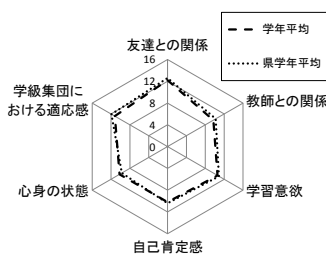


図 38 10月の状況

表 11 2 学年の6観点の変容

区 分	5月	変容	10月
友達との関係	12.1	→	12.2
教師との関係	10.1	→	9.7
学習意欲	10.6	→	10.6
自己肯定感	10.0	→	10.2
心身の状態	9.7	→	10.2
学級適応感	11.4	→	11.2

イ SSTの実施（コミュニケーション技術の習得）

SSTは、人と人の付き合い方を学び、より社会的に望ましい行動を新たに獲得していく方法の一つである。そこで、10月に実施したホームルーム活動では、クラスメイトからの承認による自己肯定感の獲得、主体的な活動に基づく達成感と、自信を得て自己効力感を高めることに主眼を置いたロールプレイを実施した。

その内容は、最初に自己紹介をし、その後決められたテーマに沿って会話を行うというものである。その際、非言語的メッセージや状況の手掛かりを利用し、他者の考えや意図・感情を読み取り、相手の全体的な人柄や性格の長所についてポジティブなコメントをする。これにより、日頃の自己の行動についての気づきが生まれ、自他理解を深めながら信頼できる人間関係を育むことができると考えた。

SST（学級活動）

学級全体に対し、社会生活技能を高め、自信の創出につながるソーシャルスキルトレーニングを実施する。内容は、言語以外の伝達手段を用いた「非言語的スキルで会話をふくらませる」エクササイズと、言語と非言語を重ね合わせた「コミュニケーション力を高める」エクササイズを実施する。

<p><ねらい></p> <p>言語のみならず非言語や状況の手掛かりを利用し、他者の考えや意図、さらには、感情を読み取るという作業を通じて、日頃の自己の行動について気付きを促す。</p>	<p><エクササイズ名></p> <p>「さまざまなスキルやマナーを身に付け、コミュニケーション力を高めよう」</p> <p>○ スキルやマナーを身に付け、コミュニケーションに生かす活動</p>
---	---

<指導の流れ>

過程	主な学習活動	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 非言語スキルや、ルール、会話のマナーについて知っていることを発表する。 <p style="text-align: center;">(インストラクション)</p>	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションを図る上で、言葉以外にもさまざまなスキルやマナーなどが必要であることを気付かせる。
展開	<ol style="list-style-type: none"> 非言語スキルの有無を比較し、どのような違いがあるかを考える。(モデリング) 与えられたテーマで言語と非言語を用い、相手への気持ちの伝わり方を考え、練習する。(リハーサル) 	<ul style="list-style-type: none"> 送り手の口調や表情により、受け手側の印象は大きく変わってことに気付かせる。 自己開示および信頼関係の構築に重点を置き、「傾聴」と「共感」を意識するとともに、多様な価値観を受容するよう促す。
終末	<ul style="list-style-type: none"> 上記の行動を振り返り、気付きや思ったことなど感想を述べる。その際、他者の良い点を見付け称賛する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の活動を通しての感想をワークシートに記入させ、フィードバックしながらまとめさせる。

学級は個性や可能性をもったメンバーが集まるいわば家族のような存在であるとともに、自分たちの課題を解決し、互いに支え合いながら生活する集団である。そのため、教師と生徒が良好な人間関係を築くことを目指し、このような機会を通じ、日頃あまり言えない本音の部分語り合うなど、創造的な営みを実現することにより不登校を生まないといった環境が形成されるものと考えた。その結果、第1回目と比較したとき、6観点中3観点において改善が見られた。10月の「学校楽しいと」の結果(図38)では、「自己肯定感」は若干ではあるが改善が見られ、特に「心身の状態」においては大幅に改善された。このことから、自己肯定感が向上したことにより、心身の健康の保持及び安定が図られたものと推測する。

(3) 「チーム支援シート」を活用した個への指導・援助

「二次サポート群」の生徒Nに対する指導・援助を検討するため、「チーム支援シート」を作成し、アセスメントを行った。

【生徒N（2年）の概要】

中学に入学して、しばらく経った頃から、極度に身体や美醜へのこだわりが強くなり、他人にどのように見られているかが気になるあまり、学校にはほとんど登校できなくなった。その後、将来への不安や自らの非力さから自責の念にとらわれ、情緒的混乱に陥ることが多くなってきた。

高校1年次は、体調不良による欠席が3日のみで、あとは登校することができた。しかし、2年次は、家庭内の影響による約2週間の欠席が見られたり、ネットへの依存傾向が高かったりなど、気になるところが出てきている。

【「学校楽しいと」の結果による生徒Nの変容】

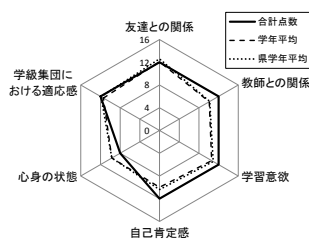


図39 5月の状況

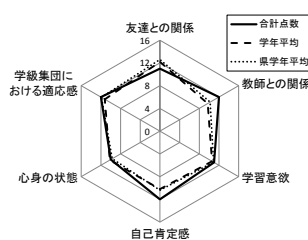


図40 10月の状況

表12 生徒Nの6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	12.0	→	11.0
学級集団における適応感	12.0	→	12.0
教師との関係	12.0	→	12.0
学習意欲	12.0	→	11.0
自己肯定感	12.0	→	12.0
心身の状態	8.0	↗	10.0
学級適応感	12.0	→	12.0

ア 5月の結果の分析

ストロングポイントは、「自己肯定感」と「教師との関係」であり、特に「教師との関係」は、全ての項目で肯定的である。ウィークポイントは、「心身の状態」で極めて低い状況にある。落ち込みや腹痛、頭痛、気分不良になることが「よくある」と回答している。また、教育相談を通して、睡眠不足、保護者との関係による影響も考えられることが分かった。

イ 指導・援助方針（「チーム支援シート」を活用）

指導・援助方針	誰が	何を	機会
緊張感や不安が強い生徒であることから、クラス内、あるいは、学校の中に安心できる人間関係を構築する。	担任 生徒指導主任	担任との安定した関係形成	個別指導 教育相談 日頃の生活
登校時には温かく迎えてその頑張りを評価し、本人の葛藤や保護者の不安もしっかり受け止め、安定した支援を継続する。	養護教諭 副担任	生徒及び保護者の支援	教育相談 電話連絡 家庭訪問

ウ 具体的な働き掛け

- 生徒の可能性を信じ、自発的な行動を引き出しながら共に成長していこうとする「共育」という意識で取り組んだ。
- 緊張感が高く不安が大きい生徒であることから、声掛けや挨拶を通じラポールの形成に努めた。
- 家庭環境も心身の状態に大きな影響を及ぼすと考えられたことから、保護者の相談に乗り、関係機関と連携の調整役を担うなど、家庭との関係改善を目指した。

エ 10月の結果の分析（「チーム支援シート」による指導・援助の結果）

「学校楽しいと」の結果（図40、表12）から、特に、「心身の状態」が改善したことが分かる。教育相談や個別指導を通じて、生徒自らの居場所を確立し、他者に受け入れられたことで所属感が増し、その結果、落ち着きを取り戻し「心身の状態」の向上につながった。その他の観点においても、「友達との関係」、「学習意欲」を除き、学年平均を上回った。「友達との関係」低下の要因の一つとしては、ネットへの依存状況と、ネット上のコミュニティの付き合いによるストレスなどが考えられるため、引き続き、今後も注意深く対応していく必要がある。

(4) 成果と課題

ア 成果

- 前年度における出席等の状況を基に区分したことを契機に、学校全体として組織的な指導体制の整備・充実につながった。
- 「学校楽しいと」を通じて面談等での話し合いが効果的になされ、生徒自身の自己理解を深めるきっかけとなった。
- 「学校楽しいと」を通じ、家族や周りが励ましなどの支援を積極的に行い、これまで以上に真剣に生徒と向き合い、支援体制を確立させることにつながった。
- 「チーム支援シート」を活用したことで、基本情報の収集にとどまらず、アセスメント及び指導・援助がチームで検討され、働き掛けが具体的になされた。

イ 課題

- △ 全体的に「自己肯定感」が低い生徒が多いことから、成功体験を積み、ネガティブな情動感情を軽減するコーピングスキル（ストレス対処スキル）や、レジリエンス（困難な状況でも立ち直ることができる力）を高める取組を強化する必要がある。
- △ 「学校楽しいと」を活用する意義等について、理解を深めるための職員研修を実施するなど、より校内支援体制を整えていく必要がある。